

逃げるオタク、恋するリア充

第一章 メッキが剥がれた日

人は誰しも、多かれ少なかれ己を偽るものではないだろうか。自分の印象をよくするため、円満な人間関係を構築するため——その理由は様々で、ありのままの『素顔』をさらけ出せる人間はごく一部に過ぎないと思う。

私——羽坂由里は、とある事情により素顔を隠している人間の一人だ。

短大を卒業して入社した、中堅の印刷会社。その会社で営業事務として二年弱働いている私は、頭のとっぺんから足の先まで、しっかり猫を被っていた。

『清楚なお嬢様』という猫を被りはじめたのは短大に入学した頃。その演技にも、今ではすっかり磨きがかかっている。

会社の人間は私の本性など知る由もなく、育ちのよいお嬢様だと思いこんでいるであろう。

——私は、自信を持っていた。これからも、絶対に本性を隠し通せると思っていたのだ。

それなのに、まさかあんなことになるなんて——

思い返すと、その日は朝から不吉な予感があった。テレビで見た『今日の星占い』は最下位だっ

たし、やたらと赤信号に足止めされ、電車も遅延——そのせいでいつもより出社時間が遅くなり、ようやく席に着いたと思ったら、お気に入りのマグカップにヒビが入っていた。

仕事中にも、パソコンの動作が遅く何度もフリーズしたり、私が使う時に限ってコピー機の用紙やトナーが切れたりした。

ついていない日は、さっさと帰ってしまおう。今日は大事な予定もあるのだし……

そう思っていたのに、終業間際、営業の笹塚から発注書をバサバサ渡された。しかも「その処理、今日中な」とか言ってくる。

この笹塚という男は、いわゆるイケメンの部類に入る容姿をお持ちで、シャープな顔立ちに、通った鼻筋、背は高くて一八〇センチはあるだろう。爽やかな笑顔も素敵な、好青年と呼ばれるタイプの人間だ。

こういった、いかにもリア充なオーラがみなぎる人間は、私が最も苦手とする人種なので、あまり関わりたくない。だが、仕事ではそんなことも言っていられない。

突然の残業を言い渡した笹塚に殺意を覚えつつ、死ぬ気でパソコンに向かった。なぜなら私は、なんとしても約束の時間までに帰らなければならないのだ。

高速で発注書进行处理し、笹塚にチェックをもらった時点で、時計の針は七時二十分を指していた。笹塚は「悪かったな、メシでも奢ってやるよ」なんて言ってくるけれど、それどころではない。とにかく一刻も早く帰りたいのだ。

表面上では申し訳なさそうにお断りし、営業部のフロアを出て、ロッカールームで制服を着替え。そして会社を出た瞬間、私は秋の肌寒い空の下を全力で走りはじめた。現在の時刻は、七時半。約束の時間は八時。ここから自宅アパートまでは、最短で四十分。……絶対に間に合わない。

仕方がないので、駅前のネットカフェに向かって走った。何度か利用はしたことがあるが、会社から近いので、同僚に見られる可能性も高い。だからあまり使いたくなかったけど、背に腹は替えられない。

息を切らして入店し、受付の店員に会員カードを差し出す。ここでも、私はついていなかった。個室はすべて埋まっていて、ほぼ仕切りのないオープン席かペアシートのカップル席しか空いていないという。さすがに、カップルシートに一人で座るのは気が引ける。げんなりしながらオープン席を選んだ私は、席に着くや否や、あるゲームを起動させた。

そう、私の用事とはコレである。多人数同時参加型のオンラインゲーム。すごく簡単に説明すると、自分好みのキャラクターを作成して仮想世界を冒険し、仲間と一緒にモンスターを倒したり、協力して謎を解いたりするゲームだ。

今日は八時に、私が所属している克蘭のメンバーで、難度の高いイベントに挑戦しようとする約束していた。ちなみに克蘭というのは、仲の良い者同士で作ったグループのようなもの。もちろん、メンバーは全員ゲームを通じて知り合った人たちである。

IDとパスワードを入力してゲームにログインすると、私以外のメンバーはすでに全員揃っていた。私はキーボードを叩いて、チャット画面にメッセージを書きこむ。

『ごめん、待った?』

『エカリナおつかれー。待ったも何も、まだ八時前w 早くも全員揃ったな』

エカリナというのは、私のキャラクター名だ。メンバーとチャットをしつつ、手持ちのアイテムや装備を確認する。うん、大丈夫だね。あとは消耗品だけ用意すれば、準備万端だ。

『エカリナは残業だったの?』

『そうだよ。営業が定時直前に仕事持ってきてさ。まじ、空気読めって思った』

『エカリナさん大変ですわw おつw』

『本当だよw マジあの営業ハゲろww』

『ほお……悪かったな、空気読まなくて』

まったくだよ。そもそも残業前提で仕事を渡してこないでほしい。繁忙期でもないのに、納期が今日中なんて! 明日の朝イチでいいじゃん。

「あと俺の家系は毛根が丈夫だな。だから禿げない」

ああ、そうですか。じゃあ、もげろ……って、え!?

背後から聞こえてくる低い声には、聞き覚えがある。

恐るおそる振り向いてみれば、そこにはよく見知った……というか、さっき会社で別れたばかりの男がいた。

笹塚浩太。

——本当に、今日の私はついてない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……

その答えが見つからなかった私は、ギギギと音がするほど硬直しながらパソコンに向き直る。

『皆、用意すんだ? そろそろ行くよー』

『あああ! 待ってもうちょい!』

思わず高速でキーボードを叩き、消耗品の準備をしていると、再び背後から低い声が聞こえてくる。

「羽坂さあ」

背中を冷たい汗が伝っていく。

「趣味は、編み物とお菓子作りじゃなかったっけ?」

ぎくう!

脳内に浮かんだ選択肢は三つ。一、ガン無視する。二、『羽坂さんって誰ですの?』と誤魔化す。

三、脅……いや、口封じする。

テンパっていた私は、どういうわけだか二を選んでしまった。

「羽坂さんって誰ですの? オホホ——」

「いや、お前だよ。うちの営業事務で、さっきまで一緒に残業してただろ」

「た、他人の空似でございます。羽坂さんなんてグレイトチャーマイニングな人、まったく知りません」

「自分のことをグレイトチャーマイニングなんて言う女、はじめて見たよ。何はともあれ、お前は羽坂

だ。信じたくなえけど」

そう言って笹塚は、私の座る回転椅子をぐるりと回して自分に向けた。

うう……仕方がない。かくなる上は、次の選択肢——その三！

私はピースサインを作ると、笹塚の目に向かって指を突き出した。

「とりゃあー！」

「なんだ!？」

「口封じ！ 目潰しだ！ その目を潰してくれる！」

「はあ？ 口封じなのに目潰しって……ってどうかお前、それが『素』なんだな？」

ぎくう!!

私は無言で椅子を回し、パソコンに顔を向けた。

……やっぱり、選択肢その一だ。ガン無視しよう。それがいい。最初からそうすればよかった。

『準備できた。遅れてごめん!』

『いいよ。このイベント、失敗したらまたアイテム集めからしなきゃいけないし、頑張ろうね』

そうそう。このイベントはとにかく準備が面倒なんだよ。絶対に失敗できない。

「羽坂ー」

だから無視だ。私には、こんな男を相手にしている暇などない。消耗品は、ちゃんと揃えた。アイテムも装備も問題なし。攻略サイトを見て事前に予習もしたから、準備万端。

「羽坂由里ちゃん」

ちゃん付けするな！ ……いや、ここは無視無視。このまま相手にしなければ、笹塚も諦めてどこかに行くはず——

「おー、園部？ 今さあ、ネカフェなんだけど。なんか羽坂が——」

園部って、営業部の園部さん!？」

「ちよつと待って!!」

超高速で椅子を回して立ち上がる。しかしヤツは、携帯電話など持っていないかった。しまった、はめられた！

笹塚は悪人みたいな笑みを浮かべる。

「やつと反応したな？ 羽坂」

「くっ、いくらですか!」

「は?」

「いくらなら手を打ちますか!? 今は月末でお金がないけど、来月なら、ごつ、五千円くらいなら」

「安すぎだろ、それ。別に金なんていらねえよ。……それより、場所を変えないか?」

笹塚はにっこりと笑って、入り口近くの受付に親指を向けた。

「ペアシートのあるカップル席に移動しよう。そっちで話をしたい」

「は、話すことなんてありません。お願いですから、私のことは放っておいて……ひえっ!」

オープン席のテーブルに、すつと手が置かれた。今まで仕事のやりとりしかしてこなかった笹塚

が、いきなり至近距離まで近づいてくる。

ち、近づきますよ!? 笹塚さん!

彼は今まで聞いたこともないくらい意地悪な声色で囁いてくる。

「今日のこと、ばらされたくないだろう? 『お嬢様』の羽坂さん」

耳に笹塚の息がかかり、肩が震える。耳の奥がぞくりとする低い声に、背中を冷や汗が伝った。

笹塚に弱みを握られた以上、私に拒否権はない。仕方なくゲームのパーティメンバーに一度断ってロゲアウトした後、店員に席移動の処理をしてもらう。そうしてカッパル席に座ったのだけだ

ど——
ヘアシートは思いのほか狭く、密着度が無駄に高かった。笹塚からはお洒落感満載の香りがほかに漂ってくるし、腕も当たって妙に意識してしまう。なんだ、この状況。

チラリと隣を見れば、笹塚が興味深そうにパソコンのモニターを見つめている。

移動する際、ゲームを続けても構わないと言われたので、お言葉に甘えることにした。しかしこの状況、はつきり言って非常に恥ずかしい。これはいわゆる羞恥プレイってやつだろうか。

とにかく現実から逃避したくて、私はゲームに集中した。

一方の笹塚は食事のメニューに目を向けて、電話の受話器を手取る。

「あ、注文お願いします。チャーハンとオムライス一つずつ。羽坂、何か食う?」

「……ケッコウです」

「ああ、あとたこ焼き一つ、追加ください」

どうでもいいけど、チャーハンとオムライスにたこ焼き? よく食べる男だな。

「飲み物取ってくる。羽坂も、なんか飲む?」

「……メロンソーダ」

すると笹塚は「メロンソーダ!」と言って笑い出した。……さつきから失礼極まりない。

「好きな飲み物はアールグレイの紅茶じゃなかったのか?」

笹塚のツツコみに、私はハツとして答える。

「……っ! じゃ、じゃあ、紅茶でいいです」

「今さらだろ。メロンソーダだな」

クツクツと笑いながら、笹塚は飲み物を取りに席を立つ。くそう、なんで出入り口のドアに鍵が付いてないんだ! もしくは板と釘と金槌があつたら、絶対ヤツを締め出すのに……

それにしても、どんどんメッキが剥がれていく。笹塚の言葉じゃないけど、メロンソーダは失敗だったよね。せめてお茶って言えばよかった。

私がかきくさしている間にも、ゲーム内ではイベントが進んでいく。

……やがてモニターの中に、巨大な敵が現れた。これを倒さなければ、イベントは終わらない。

すぐどきどきする。皆で強敵に挑むこの一瞬がとても好きだ。それに、勝利した時の達成感も堪らない。現実では、手に入らない感情だ。

ワクワクしながらキャラクターを操作していると、目の前にたこ焼きが現れた。

「食う?」

……空気がぶち壊し野郎め。

私は、無言でぱくりとたこ焼きを食べた。……美味しい。夕飯を食べてないからおさら美味しく感じる。でも今の私は、たこ焼き食べてる場合じゃないんだよ！ 強敵が目前にいるんだよ！

「ちよつと今から集中します。邪魔しないでください」

「はいはい。あ、メロンソーダここ置いとくぞ？」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

すぐ傍から、くすくすと笑い声が聞こえる。くそう、本当に面白がつてるよね。覚えてろ、後で絶対に話し合いた！

——戦闘がはじまる。私は黙々とキャラクターを操作して、攻撃を繰り返して行く。

「おお、すげえ。よく指が動くな。それに、その超真剣な顔。会社じゃ見たことねえな」

……ほつとけ！ オンラインゲームは遊びじゃないんです！

「いや、そういえば、今日の残業中はすげー必死だったか。眉間に皺寄せて、キーボード叩いてたもんな」

当たり前だ。私にとっては、リアルよりゲームの約束が大事なんだから！

内心ピリピリしつつもキャラクターをいつも通り動かし、仲間たちと協力して、敵を追いつめていく。

しばらくして、戦闘は終了した。崩れ落ちるモンスター。もちろん、我々の勝利である。いつも

なら『よし！』とか言ってガッツポーズをするところだけど、今はとてもそんな気分になれない。

はーとため息をついて隣を見たら、笹塚がニヤニヤしていた。殺意よ、こんには。

「お疲れ。夕飯、食わねえの？」

「……後で食べます。それで、どうして笹塚……さんが、ここにいらんですか？」

なんだか今さらな気もするが、私は眉間に皺を寄せつつ笹塚に尋ねる。

「そりゃあ、清楚なお嬢様キャラの羽坂さんがネットカフェでオンラインゲームしてて、しかもいつもと全然違う言葉遣いでチャットしたら気になるだろ？ 普通」

ぐつと私の顔が歪む。確かに、私は会社で『清楚なお嬢様』スタイルを貫いている。盛大に猫を被っているのだ。

「趣味は、編み物とお菓子作りだったよな。これは、嘘？」

「……はい」

ただし、編み物には挑戦したことがある。マフラーという名のポロキレが完成し、以来やっていないだけだ。……お菓子作りは、そもそも料理ができないので真っ赤な嘘である。

「じゃあ去年のバレンタインデーで配ってた手作りチョコクッキーは、なんだったんだよ」

「あれは近所のケーキ屋で売ってる手作りチョコクッキーを包装しなおしたものです」

「お前……手が込んでるっていうか、それは詐欺の域だぞ……」

うるさいな、バレなきゃ問題ないでしょう。……今、バレたけど。

「好きな飲み物はアールグレイの紅茶。好きな食べ物は何だっけ？」

「さ、最近はパンケーキにはまっています」

無駄かもしれないけど、目を逸らしつつ取り繕う。すると笹塚は、鋭くツツコんできた。

「それも嘘だろ。本当は？」

「……特にありません、なんでも好きです。強いて言うなら、コンビニ惣菜が手軽で味もおいしいと思います」

はあ、とため息をつかれた。落胆というより、呆れてモノが言えないという感じだ。普段は適当な惣菜を夕飯にして缶チューハイを飲んでるんです、とか言ったら怒り出すかもしれない。

「じゃあ、いいところのお嬢様っていうのも嘘なのか。確か親が社長とか言ってたか？」

「社長ですよ。米農家ですけど」

またため息をつかれた。何よ、そのバカにした表情——米農家をなめんなよ、日本人の主食を作ってるんだから！

「……お前、嘘が多すぎだろう。バレたらどうするつもりだったんだ？」

「バレない自信はありました」

「今まさにバレてるけどな、俺に。……なんでそんなに嘘をついてるんだ？」

「……じゃあ、逆に聞きますけど。趣味はゲームで、休みの日もネットばかりしている根暗な女なんですって会社でカミングアウトする奴と、仲良くなりたいて思いますか？」

私の問いかけに、笹塚が黙りこむ。

「普通、引きますよね？ 男の人なら、中には引かない人だっているかもしれませんが……問題

は女性なんです。普通の女性は、根暗なゲーマーと仲良くなりたくないなんて思わないですよ。遠巻きにされたり、冷たくされたり、最悪イジメられます。それなら、最初から嘘をついて猫被ってるほうが気楽なんです。どうせ会社だけの付き合いなんですから」

誰でも趣味は持っているものだ。なのに、なぜかゲームやアニメが好きだとドン引きされる。特別にお洒落で華やかで集団行動の好きな女性は、『気持ち悪い』と眉をひそめることが多い。……全員がそうだとは言わないけれど。

だからこそ私は、普段、ゲーマーで根暗な自分を隠しているのだ。

清楚ぶって育ちのよいお嬢様を演じていれば、男女関係なく円満な人間関係を構築できる。趣味も無難なものにしておけばいい。私を理解してくれる友達はいるから、会社の人間にまでそれを求めない。そのほうが断然楽だから。

それなのに、まさか同じ会社の人間にバレてしまうなんて——
チラリと笹塚をうかがえば、奴は納得したような表情で頷いた。

「……なるほどな。お前の嘘は、いわゆる処世術ってやつか」

「そうです。理解してもらって光栄です。……それで、どうするんですか？ 皆にバラすんですか？」

「バラさねえよ。そんなことしたってなんの得にもならねえだろ」

「……そうですか。私の本性に引きつつも黙っていてくれるなんて、笹塚さんは優しい人ですね」

あははーと乾いた声で笑ってやる。半分以上は嫌味だ。そもそも奴がネットカフェに来なければ

こんな事態にならなかったのだ。本当にどうして来たんだよ。一体、なんの用があったの？

眉間に皺を寄せていると、笹塚が少しつまらなげな表情を浮かべる。

「別に引いてねえよ」

「そうですか」

「信じてねえだろ」

「別に。引いてないって言っても、内心ドン引きしてる人はよく見てきましたから」

「色々とひん曲がつてる奴だなー。引くわけねえだろ。だって俺もそのゲーム、やってるし」

……は？

私は多分、呆けた顔をしたのだろう。笹塚はニヤリと笑うと、目でモニターを示した。

「『ヘイムダルサーガ』だろ？ 俺もやってんだよ」

「え、ええーっ!？」

驚愕の声が出る。仕方ないだろう。笹塚がオンラインゲームをやっているなんて意外すぎる。し

かも、私と同じゲームをやっているとは……

私の反応に、奴は満足そうに笑って顔を近づけてくる。そして――

「ひえっ!？」

「安心しろよ。誰にもバラさないから。二人だけの秘密な？」

……いきなり耳元で囁くな！ びっくりするじゃないか、リア充野郎め！

第二章 秘密の関係

翌日―― 入社して制服に着替えた私は、ロッカールームの鏡で自分の姿を念入りに確認していた。丁寧にブローしたセミロングの髪、ファッション誌で研究した清潔感のあるメイク、爪に薄く塗った珊瑚色のネイル。

ちなみに、このヘアセットとメイクは一時間かかるので、非常に面倒くさい。しかし、その甲斐あつて私の『お嬢様スタイル』は今日も完璧だ。あとは丁寧な口調で微笑みを絶やさずに過ごせば問題なし。

「羽坂さんおはよー」

始業十五分前、わらわらと女性社員たちがロッカールームに入ってくる。私はにこやかに微笑んで挨拶を交わした。

「おはようございます」

「そういえば、聞いた？ 年明けにまたスノボ旅行やるらしいよ」

「あ、聞いた聞いた！ 前に営業部で企画したのが好評だったんでしょ？ 今回は総務部も行くみたい」

「え、じゃあ高島さんも行くのかな？ それだったら私も行きたい！」

高嶋さんとは、総務部所属のイケメンだ。女子社員の間で、結構人気があるらしい。

……それはさておき、朝から本当に賑やかだ。パタンとロッカーの扉を閉め、鍵をかけていると、話を振られてしまった。

「羽坂さんは参加するの？」

「うーん、どうしようかな。私、スポーツ苦手だから……ちょっと悩み中なんですよね」

困ったように笑って、軽く首を傾げる。あくまでお嬢様っぽく、清楚さを忘れない。私のようなメッキ女は、いつポロが出るかもわからないから、常に注意を払う必要がある。

ちなみにスポーツが苦手なのは本当だ。むしろ嫌いの部類に入る。正直なところ、スノボなんぞに行く暇があるなら、レアモンスターを狩るべく日がな一日パソコンに向かっていたい。

「あはは、確かに羽坂さんってスポーツは苦手そう〜」

「そうなんですよ。参加しても、籠の施設で待機することになっちゃいそうです」

「それじゃ行く意味がないよ〜。そうだ、教えてもらいなよ。結構、面倒見のいい人いるよ？ 営業部だと……笹塚さんとか？」

笹塚——その名前を聞いて、私の鉄壁スマイルが一瞬引きつった。

「そういえば、笹塚さんは面倒見がよかったよね。スノボがはじめてな人にも丁寧に指導してくれて」

「うんうん。前回、水沢さんも教えてもらってたよね？」

「はい。教え方がとても丁寧でしたよ。運動が苦手な私でも、ちょっとは滑れるようになりました

し……」

水沢さんはそう言って、頬をうつすらと染めた。メッキな私と違って、彼女は本当にお嬢様然としている。きっと、自分を偽る必要なんてないんだろうな……羨ましい限りだ。

「良かったねえ。笹塚さんって、スノボの他にもサーフィンが得意なんだって。見てみたいよねー。来年の夏にも、何か企画してくれないかなー」

……スノボにサーフィン。本当、私からは最も遠い人種だな、笹塚。そんな奴が、オンラインゲームをやっているなんて——やっぱり信じられない。

私は、昨晚のことを思い出す。

『安心しろよ。誰にもバラさないから。二人だけの秘密な？』

耳元でそう囁かれた後、私は動揺を隠すべく、奴のゲームキャラクターを見てみたいとせがんでみた。しかしIDとパスワードを覚えていないと言われ、会話は終了。その後、ネットカフェを出た私たちは、夕飯を一緒に食べてから解散した。

笹塚は「残業のお礼に」とトンカツ定食を奢ってくれたのだが、奴も同じ定食を食べていた。ネットカフェでもあれだけ食べていたというのに……どれだけ食べるんだ。びっくりしたよ。

他の女子社員たちと一緒にロッカールームを出て、事務所に移動する。こうしてできるだけ集団行動を取ることも、処世術の一つなのだ。

やがて始業時間となり、朝礼がはじまる。恒例のラジオ体操をしながら、私はちらりと後ろを見た。

そこには、眠たげな顔でダルそうに体操している笹塚の姿。
ナチュラルに後ろへ流した髪、涼しげな目元、シャープな輪郭、高い鼻梁。

……やっぱり、見た目はイケメンだ。加えて背が高く、体格もいい。

噂によると、週に一回、営業部の仲の良いメンバーでフットサルをしているのだとか。夏はサーフィン、冬はスノボ、おまけに毎週フットサル……絵に描いたようなリア充ぶりである。

奴に私の秘密がバレてしまったのは痛い。どこかでポロリとバラされてしまったらどうしようと思不安に駆られるが、同時に、笹塚はそんなことをしないのでは……という妙な信頼感もあった。笹塚は基本的に誠実な人間なのだ。二年ほど共に過ごしていれば、それくらいはわかる。おそらく笹塚の人柄によるものも大きいのだろう。昨夜はちよつと意地悪な感じもしたが、彼は『いい人』のはず。これまでだつてずっと、そう思つて彼と接してきた。

私は気持ちを切り替えるために何度か首を振り、体操に集中する。そして朝礼を終え、今日の業務に取りかかったのだつた。

——終業後、私はイライラしながらネットカフェの前に立っていた。

なぜかという、今日の夕方、ある付箋の貼られた発注書を受け取ったからだ。付箋に書かれていたのは、『十九時、昨日のネットカフェ前』というメッセージ。もちろん、これを渡してきたのは笹塚である。

我が社の終業時間は十七時半なので、待ち合わせの時間までは一時間半もある。秋も深まった夜

はさすがに寒く、外で待つのは苦行すぎると、近くのカフェで時間を潰した。……ものすごく暇だつた。そんな時間があるなら、ゲームをしたい。

そして十九時を過ぎた今、私はこうしてネットカフェの前で奴を待っているのだが——

笹塚はなかなかやってこない。

というか寒い。くそ、付箋なんて見なかったことにしてさっさと帰ればよかった！ そもそも、どうして私は一時間半も奴のことを待っているんだ！！

……いや、私は怯えているんだ。

根暗なゲーマーであることがバレてしまったから。この約束をすっぱかすことで、笹塚に手のひらを返されないか恐れているんだ。

つまり弱み！ 弱みを握られているも同然！ なんていうことだ！

「おー、羽坂。待たせてすまん。ミーティングが——」

私はようやく現れた笹塚に、勢いよく詰め寄る。

「後生だ、笹塚さん！ なんとか六千円で手を打ってください！ 来月、必ず払うから！」

「はあ？ だから金なんていらねえって何度も——」

「クツ、金じゃなびかないか！ じゃあお米！ うちのお米をあげるから、昨日のことはすっぱり忘れて、私のことは放っておいてください！ バラさないでください！ お願います頼みます！」

私の必死の懇願に、なぜか笹塚はものすごく不満げな顔をした。

「金も米もいらぬし、バラさねえって言ってるだろ。信じるよ」

「うう、じゃあどうしてこんなふうに呼び出したんですか？ 一時間半も待たせて……その上、お米もいらぬとか……うちのお米はすごいんですよ！ お米への価値観が変わること間違いなしなのに！」

「コメコメうるさいな。待たせたのは悪かったよ。週一のミーティングが長引いてな。あと、呼び出した理由はコレだよ」

そう言つて笹塚がポケットから取り出したのは、IDとパスワードの書かれたメモ用紙。

……そういえば、昨日、キャラクターを見せてつてせがんだんだっけ。

「わざわざ持ってきたんですか？ 律儀ですね……」

「まあ、俺だけ羽坂のキャラクターを見るのもな。お前ほどレベルは上げてねえけど」

「私のキャラクターレベルはなんとというか……魔人の域なんで」

「なんでそこで照れ顔なんだよ」

ペしつと頭にチョップされた。軽く痛い！ 今のはツツコミか！

「先にキャラクター見せてもいいけど、ネカフェはろくな食い物ないし、先に何か食いに行こうぜ」

「私はネカフェのカップ麺でいいです。月末だからお金がないんです」

「奢つてやるよ」

ななな、なんとというブルジョア発言。私もかるーく『奢つてやるよ』なんて言つて不敵に笑つてみたい。でも現実には厳しい。今の私は、悲しいかなお金がない。

「いいんですか？ 笹塚さん、ありがとうございます！ 嬉しいですよ！」

「……その『お嬢様面』やめろよ。素を知った後で会社のお前見ると、鳥肌立つて仕方なかったぞ」

「失礼ですね。笹塚さん、私、焼肉食べたいです」

「俺は焼き鳥が食いたい。だから居酒屋」

そう言つて、笹塚はスタスタと歩きはじめる。奴の足は長く、歩幅も広い。私は小走りで笹塚を追いかけた。

居酒屋でとりあえずビールを注文するのは、サラリーマンのお約束なのだろうか。

私は小ジョッキ、奴は中ジョッキで乾杯する。「お疲れ」と言い合つてジョッキをかちんと合わせ、ぐびぐび飲んだ。美味しい。

笹塚はジョッキの半分以上を一気に飲むと、メニューを広げて私に向けてくる。

「何食う？」

「鶏なんこつとタコワサをお願いします」

即答すると、笹塚が肩を震わせて笑う。昨日から笑われてばかりだ。どうせ『会社の飲み会ではシーザーサラダとか頼むくせに』とか思っているんだろう。その通りだよ。会社の飲み会でタコワサなんか頼めるわけないでしょ！

眉根を寄せる私に、笹塚は笑いを堪えながら声をかける。

「すまん。別に悪い意味で笑ったんじゃないよな」

「……悪い意味以外に、どんな意味があるっていうんですか？」

「うーん、なんていうか——羽塚は面白いヤツだなあって」

「面白いのは褒め言葉じゃありませんからね。お嬢様面するなって言うから、普通にしてるのに……それで笑うんなら、会社の対応で行きます」

「悪い悪い、もう笑わねえよ。だから敬語もやめて普通に話してくれ。あの会社での喋り方は寒気がする」

寒気って……本当に失礼な奴だな！

笹塚は店員を呼んで、鶏なんこつとタコワサ、焼き鳥の盛り合わせ、ししゃも焼きとオムそばを頼んだ。……本当によく食べるよね。

やがて料理がテーブルに並び、笹塚はビールをおかわりする。私はレモンサワーを注文した。

「それで、羽塚。いつからやつてるんだ？ そのお育ちのよいお嬢様面」

「……短大の頃から」

なんでこんな身の上話をしているんだろう。それも、昨日はじめてまともに話したような笹塚に口を尖らせる私に、笹塚は続けて尋ねてくる。

「ふうん。理由、聞いてもいいか？ 趣味を隠したいのはわかるけどさ、なんでお嬢様面をする必要があるんだ？」

「別に、笹塚さんには関係ないでしょう？」

「俺は自分を偽ったことがないから気になるんだよ。なんでそんなことするのかなんて」

「……色々とかふかーいくらいいい事情があるんですよ。リア充の笹塚さんは、一生おわかりにならないかもしれないけど。あとは黙秘です」

私の言葉に、笹塚が眉をひそめた。そんな顔しても絶対に話さないぞ。そこまで話す必要性はまったくないし、話したところで面白くともなんともない。

その後は当たり前障りのない話をして食事集中し、居酒屋を出た。

そして改めて、笹塚とともにネットカフェへ向かう。その道すがら、笹塚の話聞いた。

彼は、二十二歳である私より五歳年上の二十七歳。割と有名な大学出身で、スポーツが趣味。学生時代にはアウトドアサークルに入っていたそうで、夏にはツーリングやサーフィン、冬はスノーボと年中出かけていたらしい。

「そういやさ、次回のスノーボは羽塚も行くのか？ 前は行かなかっただろ」

「うん。この前の冬は、ドウンケルでの活動が忙しかったから。スノーボに行くかはまだ考え中」

「は？ ドウンケル……？」

「ドウンケルエリア、知らないの？ 『ヘイムダルサーガ』のエリアの一つだよ。時間制限つきだけど、レア装備が狙えるんだ。去年はそれが欲しくて、休みの日はずっと家にこもってたの」

「なるほど。で、その装備は取れたのか？」

「もちろん！ 頭から足装備までフルコンプした！」

「ふはは」と笑えば、笹塚が疲れた表情を浮かべる。

そして二人一緒に昨日のネットカフェに入り、再びカップル席を選んだ。……この席、ペアシートが狭くてあんまり好きじゃないんだけどな。

「ねえ、やっぱりオープン席にしようよ。隣同士にしてさ」

「隣同士で取れる席がねえ。行くぞ」

ええっ、どれだけ人気があるんだ、このネットカフェ。駅前だから仕方ないのかな。

カップル席のペアシートに座ると、今日は笹塚がゲームを立ち上げた。そしてIDとパスワードを入力し、ログインする。

ぱっと現れた笹塚のキャラクター画面。それを見て私はビックリした。

「えっ、これ？」

「うん」

「レベル7じゃない！ え、セカンドキャラじゃなくて、メインでそれなの？」

「お前が何を言っているのか、俺にはさっぱりわからん。しかし、育てているのはこのキャラだ」
笹塚のキャラクターは、育てているという言葉を使うのはどうかと思うほど弱かった。私なら、一時間もあればレベルを10くらい上げられるというのに……

私は笹塚に許可を取り、装備やアイテムなどを確認させてもらった。すると装備は初期設定のままで、アイテムボックスもスツカラカンだった。

「……笹塚さん、初心者？ このゲーム、いつからやってるの？」

「うーん、一ヶ月前くらいかな」

「えっ、一ヶ月!? そんなに時間かけて、どうしてまだレベル7なの!? 何やってたの!？」

「何やってたって……とりあえず街中を歩き回ったな。その後、外に出て適当な敵を殴ってみたらずげえ強くて瞬殺されてさ。仕方ないから街に近いくところまで弱そうな敵を倒してた」

私は頭を抱える。笹塚の行動は、どう考えても――

「……ねえ、笹塚さん。もしかして、超初心者なの？ 他のオンラインゲームはしたことない？」

「おう。このゲームがはじめてだよ」

笹塚の言葉に、私は唖然とした。よりによってはじめてのオンラインゲームが『ヘイムダルサーガ』だなんて！ このゲーム、最初の一週間こそ無料だけど、その後は課金しなくちゃいけない玄人向けのゲームなのに！

「どうしてわざわざこのゲームを選んだの？」

「ああ、いや……友達がさ、面白って誘ってきたんだ」

笹塚は、妙に歯切れ悪く答える。

「ふうん。その友達とは、一緒にゲームをしないの？」

「……お前と同じ感じで、やりこんでる奴だからな。ゲーム上では、会えずじまいだ」

なんとという放置プレイ！ せめて装備をかうお金くらいあげたらいいのに！ 友達でしょ!？」

「それは……大変っていうか、可哀想っていうか……つまらないでしょ？」

「つまらないとか、何が面白いのかよくわからんな。敵を倒したら虫の石ってアイテムをもらえるだろ？ でもそれで鞆が一杯になっていくんだよ。最近捨てるようにしてる」

「もったいない！ その虫の石はクエストアイテムなの！ 五つ集めると、お金をもらえるんだよー！」

初心者にとって、一番手軽にお金を貯められる方法なのに、そんなことも知らないなんて……
「そうなのか」とのんびり頷く笹塚を、私は同情の目で見てしまった。
うう、むくむくと湧き上がるこの気持ち。

……放っておけない。

何が面白いかわからないのなら、教えてあげたい。一緒に冒険する楽しみを伝えたい。

それは、オンラインゲームをやりこんでいる人特有の感情なのかもしれない。上級者があれこれ世話を焼くと初心者ゆえの楽しみを奪ってしまう、と言う人もいる。ただ、笹塚は明らかにこのゲームを面白いと思っていない。課金したから、仕方なくやっつてる感じがする。

……それなら、ちよっとだけ。ほんの少し手助けするだけ。それでこのゲームを『楽しい』と思ってくれたら——

「あの、さ。あの……」

「ん、なんだ？」

あれ、どうしたんだろう。なんでこんなに緊張してるの、私！ 言葉がうまく出てこない。ネットなら、ゲームなら、『手伝おうか？』って簡単にメッセージを送れるのに。

戸惑ったところで、ハツと思ひ至る。——そっか。私、現実世界でこんなことを言うのははじめてなんだ。

黙りこんでいると、笹塚は不思議そうに顔を覗きこんできた。うう、余計言いづらい。でも、意を決して口を開いた。

「てて、て、手伝おう……か？」

「手伝う？」

「そ、その……何が面白いのかわからないなら、お、教えようか？ 余計なお世話じゃないなら」

「……へえ？ 羽坂が教えてくれるのか？」

器用に片方の眉を上げて、笹塚が聞いてくる。私はこくりと頷いた。なんだか体が熱い。このネットカフェ、暖房が効きすぎているのかもしれない。

「教えてくれるなら、ありがたいな。正直、途方に暮れてたし」

「このゲームさ、初心者には優しくなくて有名なんだよ」

「なるほどなあ。つっても、どうやって教えてくれるんだ？」

「帰宅後に、お互い家からログインしよう。それでフレンド登録すれば、一緒に遊べるし。夜は大体ログインしてるから、私のほうはいつでも大丈夫。笹塚さんの都合がいい時に、ログインしたら声かけて」

「それって、毎晩でもいいの？ 今夜も？」

意外なほどやる気な笹塚の反応に、私はちよっと驚く。

「……いいけど」

「わかった。——ついでだし、携帯の番号も交換しないか？ 連絡しやすいほうが便利だろ」

それもそうか。

私と笹塚は、携帯の番号を教え合って解散した。

笹塚、妙に嬉しそうだっただけ——気のせいかな？

一方の私は、秘密を共有した仲みたいに思えて、ちよつと恥ずかしかった。

笹塚と別れた後、電車で揺られ、ようやくアパートに辿り着いた。

私はさつそくコタツに置いていたパソコンを起動し、ゲームにログインする。

私のキャラクター・エカリナは、レベル85である。笹塚のレベルに合わせて敵と戦えば、一撃で倒してしまうだろう。そんなキャラクターと一緒に遊んでも、笹塚は楽しくないに違いない。

だから私は、新たなキャラクターを作成することにした。性別はエカリナ同様、女にする。キャラクター名をどうしようか少し悩んだが、笹塚が見てもわかりやすいよう『ユリネ』にした。

キャラクター作成後、ようやく鞆かばんやコートを仕舞い、スマートフォンをコタツの端に置いて半纏はんてんを着る。そして、手前にノートパソコンを引き寄せた。

新しいキャラクターでログインした私は、さつそく友人にチャット機能でメッセージを送る。

『ゆーま君、エカリナです』

『おつす。エカちゃん新しいキャラクター作ったの？』

『うん。初心者さんと遊ぶんだ。しばらく、顔出せないと思う』

『了解。メンバーにも言つとくよ。初心者さんよろしくね』

ありがとうと返して少し世間話をしていると、スマートフォンが鳴る。笹塚からだった。

『ログインした』

メールには、件名もなく必要事項しか書かれていない。短みじかっ！ まあそんなものかと思いつつ、私もぼちぼちとメールを返す。

『ちよつと待ってて。ユリネってキャラクターで向かうから』

友人にも『またね』とメッセージを送った後、私はユリネを操作して街をウロウロする。程なくして、笹塚のキャラクターが見つかった。

私はゲームのチャット機能を使って、笹塚にメッセージを送る。

『お待たせー』

『よろしくな、先生』

先生と呼ばれて気をよくした私は、笹塚と一緒にさつそく街の外に出かけた。

ちなみに、笹塚のキャラクターはなぜか女の子である。名前はコッコ。本名がコウタだから、女の子風に子をつけてコッコにしたらしい。

……それにしても、コッコちゃんはすごく可愛い。現実リアル世界でも女である私が作ったキャラクターより可愛いって、どういうことだろう？

『ユリ』

笹塚からのメッセージに、私は眉をひそめる。

『何？ ユリじゃなくて、ユリネだつてば』

『略してユリでいいだろ。なんでキャラ変えたんだ？ エカリナってキャラは？』

『あれは育ちすぎだから。そんなのと遊んでも面白くないでしょ？』

街の外には野原が広がっていて、モンスターがあちこちでフラフラしている。私は説明を交えつつ、コッコちゃんと一緒に敵を倒して回った。

気がつくと、時計の針は深夜零時を指していた。お互いレベル9になったところで、街に戻って解散する。『またな』と言う笹塚に、私は『またね』と返した。

ゲームをログアウトしてシャワーを浴び、歯を磨いて布団に潜りこむ。そして寝るまでの間、私は今後のことを考えた。

レベル10を超えた頃には、簡単なイベントに挑戦できるかも。そのうち、仲のいい他のメンバーにも紹介したいなあ。あと、簡単にお金を入手できる方法を教えておかないと。馬に乗れるようになったら、あちこち冒険して……そうだ、海の見える街に行こう。あのあたりの敵は、レベルを上げるのに丁度いい。

そこまで考えて、私はふと我に返った。自分がとてもワクワクしていることに気がついたのだ。どうしてだろう？

その答えは出ないまま、私は睡魔に身を任せただった。



私が勤めている印刷会社の営業部には、三人の営業事務がいる。新婚はやほやの横山三咲主任、水沢愛莉さん、そして私の三人だ。

事務所には営業部、製造部、総務部があり、隣接する印刷工場には技術部がある。

女性事務員は営業事務もあわせて八人。会社全体の雑務は、ローテーションを組んで行っている。来客対応や給湯室の片づけ、毎朝のフロア掃除にゴミ出し、出前注文を兼ねた昼当番、その他にも色々ある。

本日の私の担当は、昼当番。

朝九時半までに出前希望者から注文を取り、十一時半頃に出前の電話をしなければならぬ。

今日の出前希望者は——製造部の宗方さんが天ぷらうどん、総務部の高島さんが親子丼、椎名部長がたぬきそば。あ、珍しい、社長も出前だ。天ぷら丼、特上って……さすが社長。あとは営業部の園部さんが南蛮そばで——笹塚はカツ丼か。今は外回りしてると思うけど、昼には帰ってくるのかな？

——笹塚とゲームをするようになってから約一週間。私たちは平日の夜、欠かさず一緒にゲームをしている。笹塚がログインする時間は、だいたい夜の九時頃。それから二、三時間ほどレベル上げをしたりクエストをしたりして遊ぶ。

気がつくと私は、夜の九時が近づくと用事を終わらせ、笹塚を待つようになっていた。

普段の私はオタクであることを隠しているし、笹塚も自分がオンラインゲームをやっていることを公にするつもりはないらしい。そのため会社での私たちは、あくまで仕事の話しかしない。でも、

夜になると友人のように二人で遊ぶ。

そんな関係がなんだかこそばゆいし、不思議だ。こんな気持ちは、始めてだった。

——正午を知らせるチャイムが鳴る。

仕事をしてた人たちはきりのいいところで席を立ち、ぞろぞろと休憩フロアに向かっていた。「今日の昼当番は誰だっけ？」

「あ、私です」

「羽坂さんか。じゃあ、あとはよろしくねー」

横山主任はそう言ってひらひら手を振ると、水沢さんと一緒に事務所を出ていった。昼当番のもう一つの役割は、休憩時間中、事務所で待機すること。急な来客や電話応対をするためだ。その後、一時から二時が休憩時間になる。

お腹減ったなあ……私は、ぐうぐう鳴るお腹を押さえた。

黙々と仕事を進めていると、事務所のドアがカチャリと開いて水沢さんが帰ってくる。時計を見ると、まだ十二時三十分だ。

「お帰りなさい、水沢さん。早いですね？」

「休憩フロアがいっぱいになっちゃって。こつちでゆつくりしようと思っただんです」

困ったように笑うと、水沢さんは自分の席に着いて鞆かばんから本を取り出す。

「そうだ、羽坂さん。はい、チョコレート。お腹すいたでしょ？」

「わあ！ありがとうございます。いただきますね」

わざとらしくない程度に喜んで、チョコレートを受け取る。いや、実際チョコは好きなんだけど、少しオーバーに喜ぶのが大事なのだ。ただし女性限定である。男性に対して同じ態度を取ると、逆に女性の反感を買ってしまう。相手に応じて喜び方を変える必要があるなんて、つくづく人付き合いは難しい。

「羽坂さん、今回のスノボは行くんですか？」

「まだ考え中なんですよ。水沢さんは行くんですか？」

「うん。思い切ってボードも買おうかなって。今度の休み、笹塚さんに見てもらおうですよ」

……なぜそこで笹塚の名前が出る？ いや、別に関係ないけど。

それにしても、スノーボードか。高いんだろうなあ。冬はクリスマス商戦に向けてたくさん新作ゲームが出る時期だから、私には他のものを買う余裕なんて一切ない。

もちろん、そんな話をするわけにもいかないの、私は適当に話を合わせておく。

「ボードって、やっぱり買ったほうがいいんですか？」

「続けるつもりなら、買ったほうがいいですよ。レンタル品はあまりいいものがないですからね。でも、一シーズンに一、二回しか行かないならレンタルでもいいかも」

「そうなんですか。じゃあ私はレンタルで充分ですね」

そもそもゲレンデに行ったところで、滑れる気がしない。正直にそう言うと、水沢さんは口元を手を当ててクスクスと笑う。

……私は『なんちゃってお嬢様』だけど、水沢さんは『リアルお嬢様』という感じだ。育ちがよ

さそうで、とても可愛らしい。ふわふわした髪型もいいなあ。私は剛毛なので、ああいうナチュラルパーマはかけられない。羨ましい限りだ。

その後、再び仕事に取り組んでいると、程なくして一時になった。私は事務所に戻ってきた横山主任に挨拶し、水沢さんにも頭を下げてから休憩フロアへ向かう。

弁当を手に休憩フロアへ入れば、いつもよりざわざわしていた。そういえば今日、別の支社の人たちが来てるんだっけ。朝礼で言ってたよね。

空いてる席を探していた時、ふと、カツ丼を頬張る笹塚が目に入ってしまった。

……どうしよう。

いや、なぜ悩むんだ、私。関係ないだろう。会社では他人だ。奴とは、ただ一緒にゲームをやっているだけの間柄なんだから。

笹塚から離れたところに空いてる席を見つけて座り、弁当を開ける。そしてもぐもぐと惣菜を食べていると、目の前に影ができた。顔を上げれば、カツ丼とビニール袋を手にした笹塚の姿がある。

「なんでそんな隅っこで食うんだよ」

「……いや、ここが空いてたから」

「俺の向かいだって、空いてるだろ。来ればいいじゃん」

「……や、その……まあ、そうなんだけど……」

なぜどもるんだ、私。そしてなぜ私の向かいに座るのだ、笹塚よ。

奴はガツガツとカツ丼の残りを食べ、脇に置いたビニール袋からコンビ二おにぎり三つとインス

タント味噌汁、菓子パン二つを取り出した。……それ全部を食べるつもりか。

笹塚はインスタント味噌汁のフタを開けると、「ん」と言っただけ私に差し出した。

「何？」

「お湯入れてきて。どうせお前、お茶汲んでくるんだろ？」

「……お茶は淹れてくるつもりだったけど、キサマはお願いしますの一言も言えんのか」

「お願いします」

即答か！ まあいいけど。なんか悔しいのはなぜだ！

仕方がないと給湯室へ向かい、二人分のお茶を用意する。それから味噌汁に湯を注ぎ、盆に載せて休憩フロアに戻った。

「お湯、入れてきたよ」

「ありがとう。あ、俺のお茶まで淹れてくれたのか。気が利くな」

「……いや、これは私が飲むんだ。お茶を二杯飲むつもりだったんだ」

「なんだそれ？ もらうぞ」

「クツ、なんか笹塚さんにお茶を渡すのが腹立たしい！ 淹れなきゃよかった！」

意味がわからんと笹塚はツッコみ、コンビ二おにぎりのフィルムを剥がして食べはじめた。

私も自分の弁当に箸を伸ばす。すると笹塚は、物珍しそうに眺めてきた。

「羽坂さ、料理はできるのか？」

「できないよ。これは、近所の惣菜屋で買ったおかずをお弁当箱に詰めたもの」

「……それも、あれか？ お嬢様面のためか？」

「うん。手作り弁当はポイントが高いからね、女子力が高いと思われる」

「お前なー。絶対、詐欺だからな？ それは手作り弁当って言わねえ」

「惣菜と言ってもお店の手作りだし、厳密に言えばこれだって手作り弁当でしょ」

「それを詭弁と言っただよ」

笹塚は呆れたように言っつて、コンビニにおにぎりをパクパクと食べる。すごい、三口でおにぎり食べたよ。口が大きいというか、食べ方が潔いというか……

私も笹塚も、黙って食事を続ける。しばらくして、また笹塚のほうから話しかけてきた。

「ホントに何も作れねえの？ 料理」

「うん」

「まじで？ 何一つ？」

「しつこいな。……おにぎりくらいなら作れるけど」

「ああ、おにぎりね。羽坂の家が米農家だからか？」

「それは関係ないと思うけど。でも田植えや稲刈りは手伝いに行くから、その時におにぎりをいっぱい作ってる」

繁忙期は、家族総出で働くのが我が家のしきたりだ。両親や姉夫婦はもちろん、じいちゃん、ばあちゃん、おじさん、おばさんも手伝う。だから昼食に、大量のおにぎりとおかずを作るのだ。おかずは母さんと姉ちゃんが作るけど、おにぎりは私が作る。

笹塚は「なるほどなー」と相槌を打って、味噌汁に口をつけた。……もうおにぎりを三つ食べたらしい。私はまだお弁当の半分が残っているというのに。

しかし、こうして笹塚と話していると、さすがに周りが気になっってくる。素の口調がバレそうでヒヤヒヤだ。

「笹塚さん。会社ではあまり私に話しかけないでくれないかな？ 仕事の話は除くけど」

「なんでだよ。昼飯食ってる時くらいはいいだろう」

「笹塚さんがよくても、私はよくない。私たちの会話が聞こえて、お嬢様が実は根暗ゲームだってバレたらどうしてくれるんだ」

すると笹塚は「はあ？」と呆れたような顔をした。そして何か考えこむような表情を浮かべ、菓子パンの袋をぴりぴり開けながらぼそりと呟いた。

「……お前は別に根暗じゃねえよ。ゲームなことは否定しねえけど」

「へ？」

何を言っているんだ。私が根暗じゃない？ どこが？

首を傾げていると、笹塚は言葉が続けた。

「根暗っていうのはな、文字通り根が暗いってことだ。だが、お前は別に暗い性格でもなければネガティブでもないだろ。だからもう、自分のことを根暗って言うな」

「……夜ごとパソコンやテレビに向かって黙々とゲームしてる私は、充分暗いと思うんだけど」

「それなら俺だってそうだろ。夜はいつも、お前とゲームしてるじゃん」

「そ、それはそうだけど。休みの日だって、一日中ゲームしてるもん。あと、面白いことがあったら『グフフ』って笑っちゃうし。パソコンの前で一人グググ笑うのは、我ながら絶対面白いと思う」

「……それはお前が変なだけであって、暗いわけじゃない。俺だって、一人でテレビ見て笑ってるよ。それは暗いのか？」

変なだけって、失礼だな。……否定できないけど。

それはさておき、テレビを見て笑うことは、確かに暗いわけじゃないと思う。ということは――

「私は……根暗じゃなかったのか」

「ああ。おかしな奴ではあるけどな」

「……それは褒め言葉じゃないよね？ 怒っていいとこだよな？」

「真実だろ。だから怒る必要はない。褒め言葉じゃないことは確かだけだな」

笹塚は私を見てニツと笑う。

……なぜ顔がカアツと熱くなった。なんで？ え、まさかこれ、私、照れちゃってるの？

どうしよう、すぐく居たたまれない。話題を変えるべきだ。何を話そう……ってああ、思いつくのはゲームの話題しかない！

「あれだ！ えっと、そう、レベル15！」

「は？」

「レ、レベル15になったら、馬に乗れるクエストができるの。そ、それで、そのクエストはちょっ

と時間かかるから、今度の休みにでもやらない!？」

「今度の休み？ あー、土曜ならいいけど日曜は……」

言葉を濁す笹塚。そこでハタと思ひ出す。そういえばさつき、水沢さんが笹塚と出かけると言っていた。

「私、今週の休みはずっと家にいるつもりだし、土曜日でいいよ。日曜日は水沢さんと二人でボードを見に行くんでしょ？」

「……なんで知ってるんだ？ って、水沢が言ったのか」

「うん。今年もスノボに行くから、ボードを買おうかなって」

するとなぜか笹塚は黙ってしまった、パクパクと菓子パンを食べた。すごい、あれだけ大きくて細長いパンを三口で食べた。口の中、パサパサにならないのかな？

笹塚はゆっくりお茶を飲むと、湯呑みをテーブルに置く。

「……二人じゃねえよ」

「ん？」

「だから、水沢と二人で行くわけじゃねえよ。皆でボードを見に行くんだ。他にも園部とか総務の高島とか……高島目当てに事務の子とか、色々来る」

「そうなんだ」

「そうだよ」

結局、笹塚は何が言いたいんだろう？

『俺、会社に友達いっぱいいるリア充なんだぜ』って自慢してるのかな？ ちなみに私は、会社の人と出かけたことなど皆無である。当たり前だけだ。

「いいね、友達多くて」

「……いや、言いたいのはそうじゃくて……まあ、いいや。そういうことだから。勘違いするなよ」

「勘違い？ 何を勘違いするのもかも、さっぱりわからないよ。実は友達が少ないとか？」

「ちげえよ。友達の多い少ないから離れる。……ハア、もういい」

言いたいことがあるなら言えればいいのに。なんで呆れたようなため息なんかつくんだ？ ちょっと悔しい！

それから笹塚、前から思っていたけど、大食漢を超えて食べすぎだ！ 炭水化物を取りすぎだ！



——賑やかな街から馬に乗ってしばらく走れば、海に見える街が見えてくる。少し寂れた雰囲気のある、のどかな漁村だ。

これは、もちろんゲームの世界の話。私はユリネを操作して馬から降りると、後ろからついてきたコッコちゃんも同じように馬を降りた。

『ここがセーテの街？』

チャット画面に表示された、笹塚からのメッセージ。私はキーボードを叩いた。

『そう。街から定期船が出るんだよ。それに乗って、次はラズナの街に行こう』

先日の土曜日、晴れてレベル15になった私たちは乗馬クエストを終わらせた。……ちなみに、日曜日についてどうなったのか知らない私は、月曜日にロックカールームで水沢さんが楽しそうにスノーボードの話をしているのを聞いた時、なぜか胸がざわざわして、すぐに事務所に向かつてしまった。

昼休みにそれとなく笹塚にメールしてみたら、早々に返事が来た。

どうやら日曜日は、水沢さんに園部さん、総務の高島さんと事務の人たち、さらには製造部からも何人か来たようで、繁華街のスポーツショップに行つて買い物をしたらしい。笹塚からのメールには、『興味があるなら一緒に来ればよかったのに』と書かれていた。

別に興味はない。スノーボードなんてやりたいとも思わないし。ただ、笹塚のメールの内容に、どこか安心する自分がいた。その理由はさっぱりわからないのだが……

そして今日は火曜日。仕事を終えた私たちは、相変わらずゲームの世界と一緒に冒険している。

セーテの街を歩いていくと、ほどなくして港に到着。丁度船が来ていたのでそれに乗りこみ、しばらくすると船が動き出した。

波の効果音に、爽やかなBGM。私はユリネを操作して、コッコちゃんと一緒に甲板に出る。そして釣竿と餌を差し出した。

『これは？』

『ラズナの街まで十五分くらいかかるから、お金稼ぎも兼ねて甲板かんぱんで釣りでもどうかなくて』
 甲板かんぱんから海に向かって釣り糸を垂らすユリネ。すると、隣でコッコちゃんも釣りはじめた。
 『釣りができるなんて面白いな。それに、船から見える景色もどんどん変わっていつて綺麗だ』
 『でしょ？ 飛行船に乗れるようになったら、もっと面白いよ！ 空からフィールドが見下ろせてね、絶対感動すると思う。レベル30になったら飛行船クエストができるようになるんだ。頑張ろうね』

『そうだな、楽しみだ』

ばちゃんの水の撥はねる音がする。釣り糸を引いてみると、イワシだった。……これは、ハズレ。
 『ユリは、実際に海とか行くのか？』

『行くわけではないじゃん。リアルで海に行っても、何が楽しいのかさっぱりわからないもん』

ラズナの街に船が着くまでもう少し。その間に、一匹くらい高価な魚を釣りたいな。そんなことを考えていると、笹塚からのメッセージが届く。

『リアルな海もいいもんだと思うけどな。そうだユリ、今週の木曜、空あいてるか？』

『木曜って、仕事の後だよな。別に、ゲームする以外には何もなければ？』

『じゃあ、ちょっと出かけないか？ 俺たちがやってるフットサル、見に来いよ』

フットサル？ そういえば、営業部の面々で週に一回フットサルをしているんだっけ。平日の夜にやっていたとは……仕事の後だというのに、元気だな。

私は笹塚たちの体力に感心しつつ、だが断る、とキーボードを叩いた。

『嫌だよ、興味もないし。それに色々と気を遣わないといけないでしょ。皆にお夜食用意したりとかさ』

会社を出た後にまで、お嬢様面お嬢様面はしたくない。

『いや、そんなのいらないよ。コンビニで適当に弁当とか買ってこい』

『それでも、手ぶらってわけにはいかんのですよ！ 料理好きって設定があるんだから！ そして私は、仕事の後に惣菜屋そうざいで購入したおかずを重箱に詰める作業なんてしたくない』

『だから、いらないうつて。それより俺に弁当作ってくれよ。おにぎりだけでいいから』
 え、おにぎり？

なぜに私が笹塚におにぎりを作らねばならないんだ。もしかして、お弁当を浮かしたいとか？ 今月、厳きびしいのかな。この間、居酒屋で奢ちかつてもらったことを考えると、おにぎりくらい作ったほうがいいのか……いや、でもやっぱり面倒くさい！

『確かにウチのお米は実家から送ってもらってタダだ。でも、嫌だ！』

『なんでだよ。それにしても、やっぱり実家の米なんだな。ホント羨うらやましい。俺、米好きだしさ』
 そういえば、確かに笹塚はよくお米を食べている。明らかに食べすぎだと思うが。

……そうか。お米好きなのか。米農家の娘としては嬉しい限りだ。お米の需要が年々伸び悩む昨今、笹塚のような人間は貴重である。ここは一つ、米食推進のために一肌脱いでもいいかもしれない。もしかしたら、ウチのお米を気に入って購入してくれるかもしれないし。

『仕方ないな。おにぎりだけでいいなら、作ってもいいよ。あ、でも、こっそり渡すからね？』

普段はお嬢様仕様の手作り弁当なのに、差し入れはおにぎりのみだなんて、格好悪くて誰にも見せられない。

『いいよ。ありがとうな』

『美味しかったら、是非ともウチのお米を買ってください。ネット通販もしております』
『しっかりしてるな。それじゃ、よろしく』

笹塚は釣り糸を垂らしながら、キャラクターを操作してお辞儀をさせる。

——おにぎりの具は何にしようかな。釣りをしつつ、私はそんなことを考えていた。



約束の木曜日は、あつという間にやってきた。定時に会社を出てアパートに帰った私は、朝に炊飯予約をしていた炊飯器をばかりと開けて、ご飯をかきまぜる。

ふんわりと漂う、ご飯のいい香り。うん、すごく美味しそうだ。

私は料理の腕はからきしだが、おにぎりだけは自信がある。何しろ小学生の頃から実家で握ってきたのだ。はつきりいつてプロ並みと言えよう！

ボウルに塩水を張り、三角おにぎりを握る。具は梅干と塩昆布だ。五つできたところで、海苔を巻いてラップで包む。

ふう、ミッシュンコンプリート！

……時計を見ると、まだ七時。フットサルがはじまるのは九時半だと聞いている。考えてみれば、おにぎりを作るのには三十分もかからないのだし、もっと後で握ればよかったかも……

どうしようかな、ちよつとだけパソコンを起動してゲームをしようかな。それとも、別のゲームで暇を潰そうか。

ふと、おにぎりを見る。五つ並んだおにぎり。

さすがに寂しすぎるだろうか？ ちよつとしたおかずでも用意するべき？

面倒くさいなあ。こういう、つまらないところで悩んでしまう自分が嫌になる。

仕方がないと、私はスマートフォンを手を取った。そして数少ないアドレス帳を開き、電話をかける。

「もしもし、姉ちゃん？」

『もしもしー、久しぶりねえ。稲刈り以来だっけ？ 元氣い？ 米、食べてる？』

「お米も食べてるし、おかずも食べてるよ！ それより、簡単に作れるお弁当のレシピ教えてくれない？ 二品くらい、可及的速やかに」

『は？ 由里がお弁当作るの？ うわあ、どうしたの？ ——って男か。男しか理由はないわね！

そうかあ、とうとう由里にも男がねえ、母さん！ 由里がねえ、とうとう——』

「待って！ 母さんにバレたら、絶対話が長くなるからやめて！」

姉は、婿入りしてくれた旦那さんと一緒に、両親と同居している。

電話の向こうから『何なに、由里ちゃんがどうしたの』と母の声が聞こえてきて、恐々とした。

母は話が長い上に、根掘り葉掘り聞いてくるから、時間がない時は非常に困るのだ。

『ごめん母さん、後で話すよ。んじゃ、さっそく由里にお弁当レシピを伝授してあげましょう。スタンダードに、卵焼きとアスパラベーコン巻きでいいかな？ 簡単だし、早く作れるよ〜』

「なるほど、簡単で早く作れるのは素晴らしいね。ちよつと待って、メモメモ……つと、はい、どうぞ！」

その後、私は姉から卵焼きとアスパラベーコンの作り方を教えてもらい、材料を買うべくスーパーへ走った。どちらも、すごく簡単なレシピだった。要は巻けばいいのだ、巻けば。こんな簡単なものでも料理と言えるのなら、もっと早くに作っておけばよかった。何しろ、惣菜屋そうざいやで卵焼きを買うと三切れで九十円もする。割高だ。これからは、卵焼きくらい手作りしようと思いつきながら、卵とアスパラ、ベーコンを購入した。

そして――

いつの間にか、時計の針が八時四十分を指している。そろそろ出なければ、約束の時間に合わない。

だが、しかし！

私はタップパーの前に、葛藤かつどうしていた。これを持っていくべきか、いかざるべきか。ちなみに、出来については聞かないでほしい。

やがて私は覚悟を決め、おかずが入ったタップパーとおにぎり五つをハンカチで包み、トートバッグに詰めこんだ。……もういい。笑いたければ笑えばいい。そしてこれに懲こりたら、私にお弁当な

ど頼んでくれるな！

アパートを出て鍵をかけ、駅に向かって夜道を走る。それから電車に乗って数駅。改札を出ると、切符売り場の前で笹塚が待っていた。いつものスーツに黒いハーフコート、肩がけのスポーツバッグ。笹塚は私を見つけると、「よっ」と手を上げた。

「お疲れ」

「笹塚さんも、お仕事お疲れ様。――ところで、誰にも見られなかった!?」

さながらスパイ映画のように壁に張りついてきよるきよるする私に、笹塚は不思議そうな顔をしている。しかし、すぐに「ああ」と手を打った。

「安心しろ。俺以外のメンパーは、先に行ってるから」

「よかった……。じゃあこれ、おにぎりと……その他。開けて驚愕きょうわくするがいい」

感動とは一八〇度違う方向で、驚くがいい！ 自分でもびっくりだからね。

笹塚は嬉しそうな顔をして私から包みを受け取る。……そんなにウチのお米が食べたかったのかな？ ありがたい話だ。

「ありがどうな。じゃ、行こうか」

肩に手を置かれて、ビクツと体が震えた。思わず笹塚を見上げてしまう。

奴は首を傾かげて、「どうした?」と声をかけてくる。

どうしたも何も……か、肩に、手が置かれているのですが……。さらには、ちよつと抱き寄せられた気もするんですが……。これはどうツツコめばいいんだろう。笹塚にとってはなんでもないこ

となのだろうか。笹塚流のスキップってこと？ 私が意識しすぎ？

フットサルができるというスポーツクラブに向かうまでの間、私の思考はずっとグルグル回っていた。笹塚の手をどけることもできず、気がつけば、もう目的地に到着だ。

挙動不審な感じで立ち止まった私に、笹塚は顔を近づけてくる。そして――

「じゃあ、また後でな、由里」

耳元で囁かれ、顔がカアツと熱くなった。

「ち、近いですつ……。そ、それに笹塚さん、私のこと、呼び捨てにしました!? しかも名前で!」

「あー、ネットでの呼び方がクセになったのかな？ じゃあ俺、ロッカーに行くから。由里はコートの方に行ってるよ」

ポンと私の背中を叩き、すたすたとスポーツクラブに入っていく笹塚。私は呆然とする。開いた口が塞がらないとは、このことを言うのだろうか。

「ネットでの呼び方って……。そもそも、ユリネなのに……」

私は一人呟き、笹塚の背中を見送ったのだった。

フットサル専用のコートに入ると、コートを囲む金網の外側に、女性が何人か集まっているのが見えた。

あれは……。うちの会社の女子社員たち？ 嘘、あんなに見学に来てるの？

お嬢様スマイルは、時間が経てば経つほどボロが出やすい。気をつけないと。

ぐつと頬の筋肉を動かして笑みを作り、皆のほうへ近づく。すると向こうも私に気づいたらしく、手を振ってくれた。

「あれー、羽坂さんだ。珍しいね」

「こんばんは。見学に来ないかって誘われて、見に来てみたんです。皆さんは毎週来てるんですか？」

「うん！ だって高島さんがいるんだもん！ そりゃあ見るよね」

女子社員たちが頷き合う。なるほど、よくよく見ると、総務の人ばかりだ。

高島さんは美形で、会社でも大人気である。フットサルはつきり営業部だけでやっているのかと思っていたけど、総務部も参加しているのか。

「もしかして、営業部や総務部の他にも、色んな人が参加してるんですか？」

「うん。工場勤務の人とか、製造部の人とか。時々、社長も参加してるし」

えっ、社長まで!? それはもはや、社内イベントでは？

よくよく見ると、コートには各部署でも人気の男性社員たちの姿がある。もしかしたら、皆、目の保養も兼ねて応援に来ているのかもしれない。

「あら、羽坂さんじゃないですか。こんばんは」

振り返ると、そこには水沢さんが立っていた。手には大きなバッグを持っている。

「こんばんは。水沢さんも来ていたんですね。誰かの応援ですか？」

「え、ううん。その、前にも営業さんに誘われて……。試合を見てみたら面白いし、それからはなん

となく見に来てるの。羽坂さんこそ、どうしたの？」

「私も、今日は営業さんに誘われたんです。フットサルって、サッカーとは違うんでしょうか？」

「サッカーの縮小版みたいな感じですね。ただ、フットサルは勝負が早くつくから、見ていて楽しいですよ」

へえ、と相槌を打ちながらコートに目を向ける。確かに、サッカーのコートよりずっと狭い印象だ。

それにしても、スノボといいフットサルといい、水沢さんはスポーツが好きなのかな？ やるのも見るのも好きだななんて、私とは真逆だな。

しばらく皆と話していると、やがて試合がはじまった。営業・総務・製造チームと、工場チームに分かれて戦うようだ。

黒いジャージ姿の笹塚は、意外なほど活躍していた。サッカーすらほとんど見ない私にはよくわからないが、きつとうまい部類に入るのだろう。

自然と笹塚の姿を目で追っていることに気づき、慌てて他の人にも目を向ける。

周りにいる女子社員たちは、高畠さんに声援を送っている人が多かった。一方、工場チームを応援している皆さんも、目当ての男性社員を応援しているみたいだ。ちなみに、笹塚への声援はほとんど聞こえない。よかった。

……ん？ あれ、何が『よかった』のだろうか？

やがて勝負は営業・総務・製造チームの勝利で終わり、男性陣がこちらにやってきた。

「高畠さん、お疲れ様です〜！」

「これ、よかったですらどうぞ。皆さんも召し上がってくださいね」

なんだろう。まるで少女漫画みたいだ。女子社員の皆さんは手作り弁当をベンチに並べ、目当ての男性にタオルを渡しつつ、他の男性陣にもお弁当をすすめている。

……こんなことを毎週やっているのか。すごいな。

私はそのノリについていけず、少し離れた場所に座る。笹塚は、お弁当の並ぶベンチの脇に座っていて……あ！ 私の渡した包みを開けようとしている！ やばい！！

「あれ？ 笹塚、弁当用意してきたの？」

ツッコんでくれるな、園部さん！ 笹塚はいないものとして、放っておいてあげて！

……本当に計算外だった。こんなに女子社員たちが来ていて、気合いも充分なお弁当を用意しているなんて——知っていたら、ちゃんとしたお弁当を用意したのに。惣菜屋でおかずを買って重箱に詰めて……いや、そもそも断っていたかも。そうだよ、来なければよかったんだ！

私は殺意のこもった目を笹塚に向ける。一方の笹塚は、何が嬉しいのか笑顔で「まあな」と返事をし、包みを開けてしまった。そこには、五つのおにぎりと小さなタッパー。

周りにいる人たちも、笹塚の膝に置かれているそれを覗きこむ。なぜだ。高畠さんも見ないでくださいお願いだから！ あなたが見ると、他の女子社員たちもつられて見ちゃうんです！

「な、なんか笹塚さんのお弁当……シンプルだね」

「あの、笹塚さん。よかったですらこっちはどうぞ？ おにぎりだけじゃ、おかずが足りないでしょ

う？」

色々とかねた水沢さんが、バッグから重箱を取り出して笹塚にすすめる。その大きなバッグには、そんなものが入っていたのか。つくづく失敗した。もしかして、ちゃんとしたお弁当を用意してないのって私だけ？ 笹塚め、何が『コンビニで適当に弁当とか買ってくし』だ！ 男性陣は皆手ぶらじゃないか！ そりゃ、こんなにお弁当を並べられたら買う気にもならんわ！

笹塚は水沢さんに礼を言いながらも、タッパーを開けた。ああ、よりもよって水沢さんの前でそれを開けるなんて……。せめてもの救いは、あれを作ったのが私だとバレていないことか。

「……え、それ、おか……ず？」

「ちよ、笹塚。それホント、誰が作ったの!? どう見ても酷い出来なんだけど。もしかして自作？」
「なわけないだろ。作ってもらったんだよ」

笹塚の返事に周囲がざわめく。私は、顔を手で覆ってしまった。もう見ていられない。恥ずかしい。

タッパーの中身は、卵焼きとアスパラのベーコン巻きだ。でも、卵液がフライパンの底にくっついてうまく巻くことができず、形の悪いスクランブルエッグと化してしまった。アスパラのベーコン巻きも酷い。ベーコンだけじゃなく、アスパラもカリカリだ。というか焦げているし、カリカリになりすぎたベーコンじゃ、アスパラは巻けなかった。

そう、確かにあれは酷い出来だ。巻くだけなんて簡単なお仕事だと思っていた自分を、ラリアットしてやりたい。

「ふふ、でも、なんだか一生懸命作ったって感じがしますね。微笑ましいというか」

そんなフオーイらないです、高畠さん！

笹塚は「そうだろ？」と言って、卵焼きのようなモノを箸でつかみ……いや、掬って口に入れた。ちなみに爆笑一步手前みたいな表情をしていて、非常に憎らしい。

「お、味はいい。美味しいな」

「マジで!? 見てくれ酷すぎるのに味はいいって、なんだよそれ。一個くれよ」

「やるわけねえだろ。これは俺の弁当」

園部さんの箸をペシッと叩き、笹塚はおにぎりのラップを剥がしてばくばく食べはじめた。

……味がいいのは当たり前だ。味付けだけは、ちゃんと姉ちゃんのレシピ通りにしたんだから。俯いていると、足元に影が差した。顔を上げれば、水沢さんが立っている。そして「よかったら、いかがですか？」と重箱を差し出してくれた。

色とりどりのおかずは、どれも美味しそう。水沢さんは、なんでもできるんだなあ。

……あれ？ このおかず——いや、気のせいかな。

私は、水沢さんの重箱から出汁巻き卵をいただく。彼女は私の隣に腰かけておにぎりを食べつつ、「笹塚さんのお弁当、誰が作ったのかな」と呟いた。「さあ……」と首を傾げてお茶を濁しておく。もう、すべての記憶を空の彼方に葬り去りたい。二度とお弁当なんぞ作るものかと心に誓ったのだった。